政は正なり ⑬

公明党全国代表者会議議長　太田昭宏

「円高、電力不足、政治の混迷」への悲鳴 貫け！しっかりとした復興支援と成長戦略

おおた・あきひろ　昭和20年10月6日、愛知県生まれ。京都大学大学院修士課程修了。公明新聞記者を経て、衆議院議員当選5回。公明党代表を経て公明党議長

円高が続いている。8月19日には円相場が一時、75円95銭となり、戦後最高値を更新した。欧米の財政不安、世界経済の先行き不安が強まったことが背景にあるが、24日はムーディーズ・インベスターズ・サービスが日本国債の格下げを発表し、成長力の弱さに警鐘を鳴らしている。事態は深刻。大企業・中小企業と懇談しても、「円高、電力不足、政治の混迷の3つだけは、とにかく何とかしてほしい」と悲鳴があがる。

問題の円高――。いつも思うのは傍観しているような政府・日銀の後手・後手だ。リーマン・ショックからちょうど3年――。その後遺症を引きずり、世界のあちこちで深い穴が口を開けている。今は、国際金融危機の第二幕に突入したという危機感を持つべきだと思う。その変調は、昨年の5・6月にある。「リーマン・ショックの余震やまず、との認識をもて」と私は当時、ギリシャ・ショックにおびえて、各国が緊縮財政に走り、不況脱出への世界協調に乱れが生じていることに警告を発した。結局、リーマン・ショックの出口戦略どころか、各国が深い穴をかかえこんで、今日の事態に陥っている。

欧州は、ギリシャなどのPIIGSといわれる南欧問題が震源だったが、イタリア、スペインのみならず、市場にはベルギー、フランスまでも疑心暗鬼が漂う。通貨ユーロに内在する各国の不均衡問題が解決しない以上、その都度の対応をしたとしても、構造的にうち続く問題だ。欧州では昨年6月以降、金融緩和停止、南欧周辺国への財政負担増大、ソブリンリスクの拡大という経過をたどっているが、ユーロシステムの欠陥が露呈しているがゆえに根は深い。

リーマン・ショックの震源地・米国は、先日、米国債が最上位の格付けを失うという衝撃が走った。巨額債務がのしかかり、債務上限引上げをめぐっての議会対立、オバマ大統領のリーダーシップへの不信増大などが加わり、基軸通貨ドルへの不安が広がっている。根本的問題は、景気失速リスク二番底への懸念だ。

中国は、リーマン・ショックをほぼ1年で乗り越え、その景気上昇が世界経済を牽引した。国際資本の流入超過があり、ここはインフレ・リスクだ。金融引締めが、住宅価格高騰にブレーキをかけ、景気鈍化が懸念されることもある。

日本は、リーマン・ショックを〝全治3年〟とうたったが、ちょうど3年になる。自公政権ではそのために思い切った景気・経済対策を打って、回復軌道に乗せたが、民主党政権の成長を促す予算を取り上げていく逆噴射政策、そして今年3月の東日本大震災・原発事故で、景気回復の芽がつぶれ、デフレ不況から脱し切れない。そこに力を集中すべきなのに、今また、復興増税デフレを招こうとする論議ばかりが行われている始末だ。しっかりした経済戦略を示さずに迷走する――これがデフレと円高の悪循環をもたらしている。直面するマネーの変動にも対応は緩慢だ。当然、円が狙い撃ちされることになる。

世界は今、どの国も政治の混迷、政策の手詰まり、通貨切り下げ競争、世界同時株安のなかにある。それだけに無策の日本であってはならない。市場介入や追加の金融緩和策を進めるべきことは当然ながら、復興投資もやる。積極的な成長戦略をブレることなく貫く。東アジアや世界の協調体制を構築する。「遅い、にぶい、戦略がない」今の政治を変えることが急務だ。（次回は9月5日号掲載）

アビリタ　小澤良介の〝カク〟わしき呟き ⑭

リノベーション、進行中

古びたボロビルが、日に日に変わっていく。9月18日のオープニングパーティーへ向けて、僕たちアビリタの新社屋ビル、「リグナビルディング トーキョー」のリノベーション工事は毎日進行している。

早稲田鶴巻町にひっそりと佇み、昭和の匂いさえ色濃く漂う、五階建ての元々印刷会社兼工場だった延100坪のビルを、一棟家具屋にしてしまおう。そんな突拍子もない僕の発想から、あっという間にここまできてしまった。

工事開始から毎日現場を追いかけ、包み隠さず現場の状況をWEBで一般公開。写真を撮りFacebookにリアルタイムでアップロード。現場スタッフをはり、社員や仲間とバーベキューができる環境を整える。

一人一人の職人と言葉を交わし、みんなで意見を出し合い楽しく面白いものを作っていく。あえて完成イメージをFIXしないで、進行形でパーツを考える。僕自身にとってもこれほどワクワクするプロジェクトは今までなかったはずだ。皆でワクワクを共有する為に、今回は本当に色々な人に協力して頂いている。部分的にタイアップという形をとるなどして、より人や情報の集まる、面白い環境づくりに取り組んでいる。例えば、今回の工事のディレクターには大手アパレルブランドの施工チームの友人や、建築事務所の建築士の友人、そして塗り壁会社の社長らを迎え入れ、チーム編成をしている。あくまで僕や社員の友人関係のみで編成しているのも味噌で、これがまたいいアイデアや思い出を残してくれる。

仕事を楽しむ。楽しく仕事をする。忘れがちな事ではないだろうか？当然、先ずは社長本人が仕事を楽しんでいないと会社単位では実現不可能だと思う。それから社員にも仕事を楽しんでもらう。楽しめる環境を作る。皆が楽しくワクワクしながら仕事をできる環境が整えば、当然幸せやワクワクをお客様とも共有できると考えている指示も同時になす。こんな貴重な経験はなかなかできないし、ここまでワクワクして、楽しい経験は人生で初めての事かもしれない。現本社ビルである高輪のアビリタビルディングも、僕のプロデュースのもとリノベーションをしたが、今回はもっと広く、工事箇所が多いという事もあり、気合の入り方がちがう。

天井は全階解体し、壁も全て塗装。床はウッドフローリングを張り、古い建具はあえて残し生かす。五階バルコニーには狭いながらもウッドテラし、会社そのものも成長できると考えている。社長の最重要業務は採用人事だが、もうひとつ挙げるとすれば『楽しめる仕事環境の構築』ではないだろうか？　幸せやワクワクは伝染する。それを先ずは念頭において、楽しめる企業体作りに励んでいきたいと思う。

リグナビルディング トーキョー、通称RBTは、9月18日16時からオープニングパーティー、19日10時半からオープンを予定している。お時間が合えば是非顔を出してみて頂きたい。

最後に、今回親身になって協力してくれている、篠田くん、櫻澤くん、石塚親方、テラデコールの蒲原さん、御田製作所御田さん、トゥエルブ奥村さん、エバーライトの金子さん、そしてスタッフの皆本当にありがとうございます！　毎日楽しいです！

現在のリグナビル工事状況／http://www.rigna.com/topics/rbt

リグナビル住所／東京都新宿区早稲田鶴巻町567

（次回は9月5日号掲載）

おざわ・りょうすけ　愛知県出身。明治大学在学中に起業し、卒業年の2003年に現在のアビリタ株式会社を設立。家具のネット販売「リグナ」「ガラン」、製造、デザインなどを幅広く手がける。2010年には月9ドラマ『月の恋人』の監修を務めた

禽獣の文化

第四章　戦前戦後の業界終わる ⑳

作者　白鳥保夫

吉岡の母への追憶は際限もなかった。戦後、6歳のひもじい時期、母ひとり、子ひとりの秩父の長屋暮らしは悲惨だった。裸電球を消し、防空頭巾を被り、人ひとり通れる穴から路地の防空壕へ、母と潜った。昼夜を分かたぬB29の空襲だった。

よく生きてきたと、吉岡は幼時を回想するたびに思う。それもこれも尋常小学校一年か二年で、秩父の機屋へ年季奉公へ出された母の知恵と、子育ての必死さがなさしめたわざだと改めて感謝した。暮れも正月もない、嵐のような看取りと儀式が過ぎ、一月十五日、吉岡の自宅に近い岩槻の寺で本葬を済ませて、ようやく吉岡は仕事に戻った。

×　×　×

東京に降った一夜の雪で、一千五百人に近い人が転倒し、入院した。吉岡も入院こそしなかったが、池袋の裏通りで滑り、肋骨を打撲した。母の葬儀に駆けつけてくれた短歌会「淡交」の仲間に礼を言うため、参加した新年会の帰りだった。

湿布と包帯で痛みを堪えている吉岡が、会社の総務を一手に引き受ける藤野清子に薬局への使いを頼んでいるとき、大坂家具の西田から電話が入った。

「いま府中にいるんや。仕入れ先のマルビシ木工の工場の屋根がな、四十㌢の雪で潰れてしもうたんや。ワシすぐ飛んできたんやけどな。それはそれとして田崎吉蔵はんが今朝亡くなりはったというがほんまか」

キンキンと脳天に響く西田の独特の声が、吉岡に衝撃を与えた。

「ちょっと待ってください。ついこの二、三日前、田崎商店の幹部と会ったばかりだけど、亡くなられるほど悪いとは聞いてません。吉蔵さんが本当に亡くなられたとすれば、業界大問題です。ウチの記者から一報が入ると思いますが…」

「まてや、明日通夜で明後日密葬いうてはるぜ。お前のとこ近いのやさかい、確認して電話くれんか」

〈またしても灯台下暗し〉か。

吉岡が田崎商店の村田総務部長に電話を入れさせた結果、老衰に肺炎をこじらせ、田崎吉蔵が今朝亡くなったのは事実だった。通夜、密葬も西田の言った通りだという。

〈冠婚葬祭が苦手なのは生来だが、それにしても広島から電話で知らされるとは〉

吉岡は業界のマスコミとしての自社のウカツさに苦笑しながら、西田へのダイヤルを回した。

「惜しいことに事実でした。真の大物でしたね。一つの時代を築き、背負った人でした。ああいう方事に控えめな会社ですから、そう騒ぐこともなく、献花なども辞退でしょう。黙っていても全国から、業界の弔問客が押し寄せるでしょうが」

「うちのときも来てもろうたさかいな。通夜、密葬と顔出させてもらわないけんやろう。うちの会長が西の業界のために働かせてもろうたが、吉蔵はんも家具連盟を通じて、業界に大きな仕事をやらはった方や。惜しいことをしたな」

平素、口の悪い西田にしてはめずらしく心から吉蔵の死去を惜しんでいた。大阪家具の前社長夫人の葬儀に、吉蔵が来てくれた恩義もあった。

明治も遠くなり、一代でたたきあげた筋金入りの経営者が消えていくのは、家具業界も例外ではなかった。

全青協の創立総会で祝辞を述べてくれた山口和助も、既に四年前に亡くなっていた。それ以前、全国家具連盟の副会長を長く務め、田崎吉蔵の後、会長となった笹川武も、虎のような風貌を遺影にして旅立っていた。

（次号へ続く）